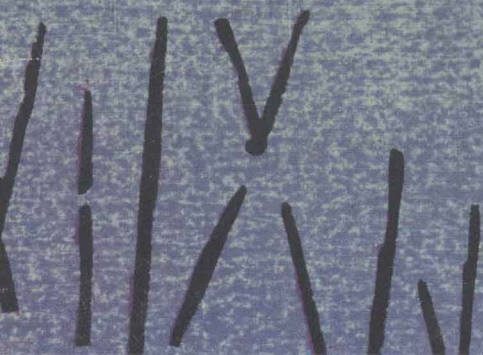


桐の花

— わが少年の日 —



石森延男



の花

—わが少年の日—

石森延男



大阪教育図書



著者紹介

北海道のサッポロに生れる。東京高等師範学校卒業後、教育の道にすすみ、文部省にまねかれて、国語教科書の編集にあたる。かたわら児童文学の創作にも興味をもち、一九三九年に小説「咲き出す少年群」で、第三回新潮賞を受賞。一九五七年に長編「コタンの口笛」で、第一回木明文学賞、ならびに第五回産経児童出版文化賞を受賞。つづいて一九六三年に、長編童話「パンのみやげ話」で、第一回野間児童文芸賞を受賞。昭和女子大学教授。東京都杉並区阿佐谷北三丁目三二―一四に住んでいる。



昭和四十三年三月二十二日印刷 昭和四十三年三月二十五日発行
桐の花―わが少年の日― 定価七九〇円

著者 石森延男

発行者 横山 実

印刷者 岩岡敏志

発行所 大阪教育図書株式会社

東京都千代田区神田錦町三の一七・大阪市東住吉区田辺西の町六の四

振替(東京) 五〇四・(大阪) 二五〇 / 電話(東京) 三九四・六四六(代) (大阪) 六六・四六六(代)

©石森延男・一九六・岩岡印刷・堀越製本



**KIRI
NO
HANA**

目次

1

ああ よき時代 きみたちは

房のついた学帽……………9

カメラマン……………15

まり投げ……………23

ニシン……………31

腹ペコ……………39

つまり先生……………45

人だま……………55

標本づくり……………71

好奇心は屈折していく……………76

ゼロ……………81

大魔王……………91

ごっこ……………102

2 桐の花

西洋人形	1	1	3
「と」の一語	1	3	0
入佐先生	1	4	3
明笛	1	5	2
「白」	1	5	9

3 おばけの絵

母	1	7	1
詩人コックさん	1	8	4
道草	1	9	8
陣取りあそび	2	1	2
おばけの絵	2	6	2
マンサク	2	5	1
ねつき遊び	2	5	8
おまんじゅう	2	6	2

子ヒツジ	2	6	8
紅白の餅	2	7	3
時計台の鐘	2	7	8
豆の葉っぱ	2	8	2
遠い花火	2	9	2
おばけの絵	2	9	4
ランプの掃除	3	0	5
野いちご	3	0	8
反物売り	3	1	4
べそかいて	3	1	9
こけこっこの花	3	2	1
ブドウ液	3	2	5
しんこじいさん	3	2	9
コクワの実	3	3	6

いなくなつたニワトリ	3	4	1
おとつあんの短歌	3	4	6
雪の日	3	5	4
茶色っぽい煙	3	6	1
ブタ遊び	3	7	1
創成川	3	7	4
よい種子を	3	8	4
ふんわりとしたあたたかさということ			
花岡大学	3	8	6
石森先生と私	3	9	6
横山実			

1 ああ よき時代 きみたちは



房のついた学帽



ぼくは、十三才から十五才まで、小学校で暮らしていた。今ではもうそんな制度はなくなってしまうが、そのころは、小学校を尋常科六か年と高等科三か年とに分けてあった。

ぼくは、札幌師範学校の付属小学校尋常科一年に入学した。すぐ上の姉の春ちゃんが同じ学校に通っていたから、なにかとつごうがよかったのであろう。うちのすぐそばに、公立のヤマハナ小学校があった。あるいて十分もかからないほど近いのに、付属小学校は、遠くて遠くて五キロもあり、子どもの足であるいて、

ゆうに一時間半かかるのである。それでぼくは、いささか不平であった。

＼ヤマハナ小学校と付属小学校と、いったいどこが違うんだ。学校の先生だって、違うわけはないだろうし、教科書も同じだし、近所の友だちとはなれてまで、遠路わざわざ通学するなんて、やりきれないや。＼それに付属小学校の帽子が気に入らない。屋根の形をした三角帽で、横っちょに紅い毛糸の房なんかくっつけてある。これがまたよその子どもたちの目にとまり、さんざんやじられる。あまりうるさいので、ぼくは、どこかの子どもがやってくると、いち早く帽子を脱いで、わきの下にかかえこんであるいた。＼こんなにまでして付属に通わねばならんのかな。＼やはり不平たらたらであった。ところが、六か年通学しているうちに、いつのまにか付属小学校になじみができてしまった。たとえば、学校のまわりには大きなカラ松が茂っている。春には、いち早く芽をふいていい匂いをふりまく。秋には、黄色になって明るくなる。カラ松の幹には、ヤニがでる。それを細い枝の先にくっつけて水に浮べると、ヤニがとけて、少しずつ枝が動き

だす。戸外運動場には丘や谷がある。△ヤマハナ小学校の運動場なんか、平べったくって、つまらないや。▽

大きな藤だなが中庭にある。白い花と紫の花が、もっそりとふさになって咲く。本校の学生といっしょになって運動会をやる、学芸会もやる。一年に二ど教生が、教えにきてくれる。教生というのは教育実習の学生のことだ。△こんなこと、ヤマハナ小学校にはあるまい。▽

玄関ポーチの形から、小使さんの鳴らす鐘の音、教室のすみにある弁当棚の匂いまで、すきになってしまった。もうヤマハナ小学校にはみれんなんかない。少しぐらい通学の道が遠くたって苦にならないや。とちゅうにあるまんじゅう屋の店先や、さくらんぼや、梨、ブドウなどの果樹や、牛舎や、かじ屋や豚屋など、なつかしくなって、房つき帽子の友だちもだんだんふえ、いよいよ気が強くなった。

尋常六年をすませると、同じクラスの友だちは、ほとんど札幌第一中学校（現在の北高等学校）の受験におもむいた。父は、ほくに受験するか、



どうかといって、
ぼくの意志をた
しかめる。

受験しなければ、
このまま高
等科に進学する
ことになるから
である。

ぼくは、友だ
といっしょに中
学生になって、
雪印の帽章に白
線のついた海軍
帽をかぶりたい

と心動かないわけでもなかったが、しかし、受験をしないと父に断った。

「なぜだ。みんないくじゃないか。」

そうたずねられても、これぞというわけはなかった。ただ、六か年通い
なれた付属小学校がすきになり、離れがたくなつたともいうよりほかに
理由がない。

「それもよからう。」父はそういつたきり、なにもききだすことをもな
く、ぼくのわがままを許してくれた。父は、そのころ札幌第一中学校の教
師をしていたので、できれば、ぼくといっしょに通勤したかったのかも知
れない。

居残った友だちは五、六人にすぎなかった。そこへほかの小学校から転
入してきたものが加わって、三十人ばかりの学級ができた。

高等科生になると、いよいよ附属小学校がすきになった。すきというよ
りは、自分の家みたいに気がおけなくなり、自由になり、たのしさが増し
た。先生の手伝いをしてさえも、えらくなつたように思い、他校の展覧会

に出品する図画や習字を書いて得意になり、下級生を遊ばせてやったり、学校の年中行事の準備をせつせとやったりした。

高等二年を終えたとき、ある友だちは、就職するために学校を去っていった。父は、このときも、ぼくの意志をたずねた。就職するかどちらかである。ぼくは、もう一年居残るといって、とうとう高等三年まで在学したのである。いくら学校がよくてもこれ以上居るわけにはいかない。といって、いまさら札幌第一中学校へ入学するのも損だし、そのままずると本校つまり師範学校にウナギのほりにはいっていった。

まあ、ぼくは教師稼業で一生を終わるが、その第一歩は、ここにあったといつてよからう。